

---

# 司馬懿仲達の憂鬱

堕落論

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

司馬懿仲達の憂鬱

### 【Zコード】

Z2154Y

### 【作者名】

堕落論

### 【あらすじ】

司馬田尚志しまだひさし

司馬田尚志は冴えない中年オタ、離婚届を提出した帰りに普通じゃない事故に巻き込まれてしまい死を迎えるが、その普通じゃない事故の張本人によつて自分が書いていた二次小説の元になる世界に転生させられてしまう。

自分が知つているゲームとは微妙に違つてゐる世界……でも自分が知つているキャラ達は多数登場する世界……姿は若者、精神は親爺の主人公の明日はどうちだ

## プロローグ（前書き）

この小説はオリキャラ主人公&筆者の観念世界での話と書つ事で、その辺りが苦手の方はご遠慮して頂いた方が良いかとは思われます。それでも良いよ。という優しい方はお目汚しかとは思われますが付き合いくださいませ。

御批評、苦言応援等ごぞこましたらどんどん頂けたら幸いです。皆様からのコメントが筆者の成長につながります。では拙い物ではございますが宜しくです。

## プロローグ

「司馬田さあ～ん、司馬田尚志さあ～ん……」

事務的な声が部屋に響く。「こはうどんで有名な某地方都市の市庁舎の市民課である。

司馬田と呼ばれた男は年齢は40半ばであろうか、くたびれたスース姿で、何処か人生に疲れたと言う表情で先程名前を呼ばれた窓口に向かい、係りの者から書類の様な物を受け取る。

受け取った書類を、これも書類発行の際の料金を払う時に一緒に受け取つた市庁舎の名前入りの封筒に入れながら、彼は一階ロビーを通り抜け玄関から外に出る。

市庁舎から退出し駐車場に置いてあつた車に乗り込みネクタイを緩めると車を発進させた。

「はあ～っ……」

市庁舎前の交差点で信号に捕まつた彼は大きな溜息を一つ吐き、カーステレオのCDトレイから半分ほど顔を出しているCDにチヨンと触れた。少しの間をおいてカーステレオからはいつも好んで聴いている80年代ポップスが流れ出した。

「婚姻届を出した時も思つたんですが、紙切れ一枚で簡単に家族になつたり他人になつたり出来るもんなんですねえ……」

青信号を確認し、まるで誰かに話しかけるかの様に独り言を呟きな

がら車を発進させる。

「さて……離婚届は受理されましたし後は午後から家裁で子供達との面談の日取りと養育費の相談ですか……どうせあちらは弁護士さんのみの出席でしょうから……気が重いですねえ……」

今日は休日となっている自分の職場に向かいながら、車を走らせている途中に建つていてる地方裁判所を横目で見て心底ダルそうな口調で、また独り言を呟いた。

車内で今後の事を考えながら胸元から取り出したセブンスターに火を点けようとした時に、突然車のフロントガラス一杯に真っ白な鳥の羽根の様なものが拡がつて視界を覆つ。

「へつ……？ 何なんですか……？」

驚愕で素つ頓狂な声を出した身に次に起こつた事は、ドスンと何かが車のボンネットに落ちて来たかのような感覚

「えつ？ エエツ……？ うわあつ！…」

そして何が何だか分からずに、真っ白な視界を振り切ろうとして慌ててハンドルを切つた直後、凄まじいまでの衝撃が彼の車を横転させる。その衝撃はシートベルトをしていなかつた彼を、いとも簡単に車外に放り出して一度二度と路面にバウンドさせる。

彼は一度田の路面との接触で頭部を強く打ち、二度田三度めの接触では、衝撃で折れた肋骨が、どの臓器かは判別出来ないが刺さったのであろう激痛に、自らの死を否が応でも理解した。

「何なんですか今は…………それより…………もう多分駄目でしょう  
ねえ……将太、愛香……」「めんなさい……お父さんは…………」

薄れ行く意識の中で子供達の事を思い浮かべる一方で、混濁する意識の中では

「ああ…………そう言えば部屋の掃除もしてませんでしたねえ……床には工口本が散乱している筈だし……パソコンも一次小説書きつ放しでシャットオフしてませんね…………」

どうでも良い様な事を考えつつ彼の意識は途絶えた。

## プロローグ（後書き）

どうも墮落論と申します。

初投稿となりますがいかがでしたでしょうか？

今後とも細々と続けて参りたいと思ひますのでどうか宜しくお願ひ致します。

## プロローグ 2 真実

「…………せんか？…………さん、…………さん」

誰かが自分に向かつて話しかけている声に反応する様に意識が徐々に戻つて来る。未だ混濁した意識ではあるが、先程自分の身に何が起こつたかはハツキリと覚えている。

(取り敢えず声が聞こえると言つ事は生きているみたいですね……体の感覚が何か変な感じですが、まああれ程の距離をフツ飛ばされればねえ……兎に角、生きて良かつたと言つ所でしょうか)

だんだんと覚醒しつつある意識で彼はそう考えた後、ゆっくりと目を開けようとした時に、いきなりハツキリと声が聞こえた。

「まあ、そう考えたいのはヤマヤマでしょうが、残念ながら貴方は既に死んでいます」

「はいっ？」

唐突に聞こえて来た声に思わずゆっくりと開けようとした目を見開き、寝たままの状態で辺りを見回す。意識の片隅で何処かの病院の一室である事を期待していたが、淡い期待を者の見事に打ち砕く様に辺りは暗闇で覆われていた。

「此処は…………何処でしょつか？」

「まあ、貴方達の世界の分かり易い言葉で言つのならば『死後の世界』ってやつですかねえ」

呆然自失となつた状態で口から出た独り言に、すぐさま答えが帰つて来た事で、もう一度だけ目の動きだけで辺りを見回してみたが、先程から答えを返してくれる者の姿は確認出来ない。

「えっとお……何から聞いたら良いのか……取り敢えず私はどうなつてるのでしょうか？」

通常時なら錯乱して喚き散らしてもおかしくない状態であると言つのに、今は現状把握を最優先するべきと考え直した結果。彼は場の空気を読んで最適な質問をした筈なのだが

「貴方……変な方ですねえ……大抵の人間は、こういう状態に陥ると著しい恐慌状態を引き起こすものなんですけどねえ……失礼ですけど貴方、生前に天然だとかズレてるとか、他人から言われてませんでしたか？」

返つて来た答えがこれである。返答の際の生前と言ひ單語が妙に生々しく感じられたが、それはこの際置いておいて、彼は微妙に痛む頭で言葉を返す。

「確かに喚き散らしたい衝動はありますが……私としては出来るだけ今現在の状況把握をしたいが為の質問のつもりだったのですが、何かおかしかつたでしょうか？」

「ふむ……良く言えば落ち着いている、或いは達觀していると言つのでしきうが……未だ天然ボケの疑いを捨て去る事が出来ませんねえ……」

「何か非常に酷い事を言われていると思うのですけれど、兎に角現

状の説明をお願いできませんか？それを聞いた上で、錯乱して暴れるなり、絶望して泣き喚くなりしようつと思ひますので……」

「（やはり変な人にはかいかも……）そうですね、客観的な事實を申し上げますと、司馬田尚志さん、貴方は不幸な事故でお亡くなりになりました」

「はあ……不幸な事故ですか……」

「はい、不幸な事故です。我々の主、貴方達が神と呼び崇め奉る御方が下界に降臨された際の、ちょっととした手違いに貴方が巻き込まれた形になってしまったのです……本当に申し訳ありません」

それまで事務的に話していた声の主の口調が事故の謝罪の際には悲痛さが感じられる声に変わっている事が、これは間違なく真実の事であるひとと彼を納得させた。

「そうですか……まあ人である自分には分からぬ世界の事ではあります、主が降臨されたと言つ事は余程の大事だったのでしょうかね……」

「はあ……まあ……その……」

何故だか相手の口調が急に歯切れの悪いものとなってしまった事に、若干の嫌な気持ちを感じつつ先程より詰問口調で問つて見る。

「もう一度御聞きしますが余程の大事で貴方の主は降臨されたんですね」

「…………」

「何で無言になるんですか？」

「いやあ……あのね……大変言い難い事なのですが……今回我が主が此の地に降臨されたのは……そのお……貴方が言つ様な大事では無く……えへとですねえ……天界るるぶに掲載されている程の『さぬきうどんの店』に行く為だったんですよ……ハハハ……」

「はああああああああつ？」

事故の真実と声の主の渴いた笑い声を聞いた彼は、あらん限りの声を張り上げた後、あまりのショックの為にまたもや意識を失っていくのであった。

## プロローグ 2 真実（後書き）

どうも墮落論です。

『司馬懿仲達の憂鬱』 プロローグ2をお届けいたしましたが如何だつたでしょうか？出来るだけ早くプロローグを終了させて本編に入りたいと思いますので今後ともどうか宜しくお願いします。

## プロローグ 3 提示

「…………ひ、うひひ…………うひうんつ…………」

（何か悪い夢を見た様な気がしますね……うん、悪い夢です。神様つてのが居るって事は良しとしましそうですがその神様がうどん食べる為に降臨するなんて……何処の『聖おにさん』設定ですか……そう、これは夢です。此処の所離婚調停等で疲れていた私が見た夢なんです。ええそろそろ決まっています）

混濁する意識の中での、彼はそう考へて今度こそ本当の世界へと希望を抱きながら目を開けようとした時、

「いや、現実逃避をされるのは結構なんですが……何度氣絶されても司馬田さんが死んでいると云つ状況は変わらないですよ」

宛ら全ての希望を打ち砕くかの様な声が聞こえて来る。何とは無く理解はしていたが、改めて突き付けられた事実に対しても常な理不尽を感じて声を荒げてしまう。

「何を他人事のように仰っているんですか？そもそも貴方の主が、うどんを食べたいが為に下界に来なければ、今此処に私はいない筈じゃあないですか！！」

「まあその事に尽いては我々天界も甚だ遺憾には考へているのですが、我々は決して今回の不幸な事故を他人事などと無責任な事はちつとも思つていませんですよ。それ故、事態收拾と事後協議の為に態々大天使の私自らが天界から派遣されて来たのですから、人の身でありながら光榮だと思って下さい」

「え~と……甚だ遺憾であると言つ政治家の様な答弁とか、貴方が大天使であるとか、事故の張本人である貴方方が何故上から目線なのか等、ソツコニ所は多々有るのですが…………」

「それがどうかいたしましたか?」

「言外に何か文句があるのかとでもいう雰囲気を漂わせた相手の言葉に彼は、もうどうでもよくなつてきて投げ遣り氣味に言葉を返す。

「いえ、これ以上不毛な会話を続ける事は精神衛生上良くないって事だけは理解が出来ました……で、事態收拾と事後協議と言う事ですが、結局私はこれからどうすれば良いのでしょうか?」

「ほう、御理解が頂けたようで幸いです……もう少し錯乱状態で抵抗を示すかと思っていたのですが……司馬田さんって、やはり少し人としてズレていませんか?」

「貴方は話を纏めに来たのか、私の事をからかいに来たのかをハッキリとさせた方が相互理解の為に宜しいのではないかと思いますが

……」

「いやいや、これは失礼致しました。でも突発的な事故でお亡くなリになつたのに、此処まで冷静な方は本当に珍しいんですよ……まあそれはさて置き本題に入りましょうか」

「やつとですか……あんまり前フリ長いとUU読者にソツポに向かってしまいますよ」

「ハイ、其処の死人、メタ発言禁止!!」

「何で天界の大天使とやらがメタ発言なんて言葉知ってるんですか  
つー!?」

「まあ、近頃の天界は何でもアリですからね……と、言ひ訳で本題  
に入ります。突然ですが貴方には転生して貰います」

「はいいつ？」

「転生ですよ。テ・ン・セ・イ。分かりますか？ 転生！！ 貴方  
が望んだ世界に転生して頂いて、我々天界が付与したチート能力全  
開で「そりやあもう大騒ぎさつ、イエ～イ！」ってな具合で新しい  
人生を楽しんで貰おうと言う事で…… オケ？」

「いやいや…… オケ？ って…… そんな軽いノリで言われても、元  
の世界に生き返るって事は出来ないんですか？ 私つい最近離婚が  
成立しましたんで将太に愛香、一人の子供達の養育費も払っていか  
なければならぬんですよ……」

「ああ…… 言い難いのですが生き返るのは無理ですねえ…… だつて  
貴方の遺体はもう荼毘に付されましたし、貴方が死んだと言う事を  
かなりの人が認識しているんですよ。それらの認識を全部書き換え  
て貴方の人生を再構成するなどと言うチート創生なんて、ぶっちゃけ  
面倒くさいだけですし……」

「面倒くさいって…… そもそも貴方達の手違いでしょうが

「それについては重々申し訳ないとは思っていますが、実質貴方一  
人を生き返らせると言葉が死んでから以降に出生した新たな命を全  
て無かつた事にしなきゃいけないんですよ…… そんな悪魔の様な所

業を貴方は望むんですか?」

「ぐつ……」

「ですからここは一つ貴方に我慢して頂いて快く転生して頂けないかなあと、我々は思う次第であります……勿論転生した世界での身の安全及び快適なセカンドライフは天界が保証しますよ」

「二人の子供達の養育費は……私がそれを払えないと元妻と子供二人の生活の心配が……」

「それは無問題です!! 貴方が御子さん一人を受取人にしている生命保険ですが此方の方で手を加えておきましたので、毎月30万円程は奥さんの口座に入る様になっていますし、貴方の両親にも同額が振り込まれますよ」

「貴方方はうちの家族を全員一ートにでもするおつもりですか?」

「まあそこは天界からの誠意と言つ事で御納得を頂いて、如何でしょうか後顧の憂いも無くなつた事ですし、ここは一つ快く転生して頂けませんかねえ」

そう言つた声のトーンは大天使と言つよりは、自分が加入した生命保険のセールスレディに近いなあと、彼は現実逃避が半ば入った状態でぼんやりと考えていた。

## プロローグ 3 提示（後書き）

どうも墮落論です。

『プロローグ 3 提示』を書かせて頂きました。

次回でプロローグ終了いたします。

今後とも頑張りますので宜しくお願い致します。

## プロローグ 4 旅立ち

「はあ……何と無く釈然とはしませんが、ここは黙つて貴方の言う通りに転生した方が話が早く転がりそうですねえ……そろそろ本編に行かないと評価ポイントにも影響が出て来るでしょうし」

渋々と言つた表情で尚志は大天使が言つた転生話に了承の意を示した。

「誰に向かつて話してるか……何て事は今更なので突つ込みませんよ。それよりもその答えは転生受諾と捉えても宜しいのですね」

「ええ、どのみち一度と子供達に逢う事が出来ないのであれば、この世界に未練は無いですからね……ところで私はどう言つた世界に転生させられるのですか？ 先程の話ではチート能力の附加と身の安全は保障されると言われてましたが……」

「はい、我々天界が貴方の望む様な「俺様、Tueeeeeee！」的な力を付与しますので、貴方自身が死ぬ羽目になる様な事は余程の事が無い限り発生しませんよ。それでどの様なチートを御望みでしようか？」

「どの様な……と、言われましても、行く先が何処か分からなければ、能力の御願の仕様が無いじゃありませんか」

「ああ、それもそうですねえ……ではお教えしましょう。今回貴方が転生して頂く世界は……ズバリ『真・恋姫十無双』の世界です。どうです嬉しいでしょ？ヒューヒュー」

大天使と名乗る声は、そつそつと頭の悪いアイドル同会者の様に囁かし立てる。

「あのね……」

「ん？ 如何しました？ 何か転生先に御不満でもござりますか？」

「いや……不満と言つよりは、何故に『真・恋姫十無双』の世界……なんでしょうか？」

「え っ、だつて貴方の事を知る為に部屋を見に行かした織天使から報告では、貴方の机上には恋姫のエロゲーに三国志関連の資料が散乱し、床には恋姫関連の同人誌、それに何よりもPCには貴方ぐらいいの年齢の方が書くには、相当痛くてキモイ一次小説が書きかけのままだそうじゃないですか」

「い……い、痛くてキモイ小説……ですか」

「いやまあ、その辺りは個人の見解の相違つて奴でコメントは差し控えさせて頂きますが……」ここまでされるのであれば相当お好きなんだよウ、その世界が」

「あのですね……私は恋姫が好きと言つよりも、ただ単に恋姫が題材として案外書き易かつたから書いてたんですけど……」

「何ですって……では山と積まれた三国志関連の資料と床に散らばる1~8禁恋姫同人誌は？」

「まあ、いくら一次小説とは言え嘘八百は書きたくなかったので、それなりに資料は集めましたし……後、1~8禁本は……单なる

自分の性的趣向です「

最後の方で尚志の声が小さくなってしまったのは御愛嬌と言つたと  
ころか。

「おやおや、これは困りましたねえ……我々は貴方の部屋の状況から鑑みて転生先は恋姫の世界しかないと判断したので、他の転生先など用意しなかつたんですがねえ……」

「別に恋姫の世界 자체が嫌いな訳では無いですから、其処に転生させて頂ける事については否かでは無いのですが……」

「いやに奥歯にモノの挟まつた様な言い方をなさいますねえ」

「いや、先程のチート機能の件なんですがね……転生先が恋姫の世界と言うのならば、貴方が提案された「俺様、強ええええ！…」的な要素は私的には不要かなと思つたものでして」

「その訳は……伺つても宜しいですか」

「ええ、大した訳でもありませんからね……まあ何と云つて、恋姫のどの辺りに転生させていただけるか全く分かりませんけれども乱世である事は間違いないのでしょ？」

「まあ、そうなりますねえ」

「いくら転生者と言えども転生世界の摂理を無視した様な武力は、やがて自分や周りの世界を壊していくように思つんですよ。それなら超的な武力などよりは知力や魅力の方を私は望みます、まあ何よりも私には戦場での縦横無尽の働きなぞ出来そうに無いですか

「うね

「ふむ……まあ、それが貴方の御考えであるならば重視させて頂き  
ますが……ならば貴方に対しての付加は統率力、魅力、知力、政治  
力……後は『主の祝福』と……」

「何ですか？ その『主の祝福』ってのは……」

「ああ、これは先程からの話に出ている貴方の転生先での命の保証  
ですよ。これがあれば何があつても貴方は死ぬ事はありませんし、  
勿論、大怪我ひとつ負わずに新たな人生を送れますよ」

「ん~……」

「どうしました？ まさか貴方『主の祝福』までも要らないと言つ  
のでは無いでしょ？ 貴方がこれから転生する先は乱世なん  
ですよっ！ 貴方が考へているよりもずっと『死』と言つものが  
現実的な世界なんですよ」

「ん~……確かにそうなんでしょうがねえ……チート機能付けて貰  
つて言うのもなんですが、転生したら少しほは前向きに生きようと思  
うんですよ……それこそ日々を一生懸命にね……」

「…………」

尚志の揺るがない決意に大天使は返すべき言葉を失つてしまい、暫  
し重苦しい沈黙が辺りを支配する。どのぐらいの時間が経つたであ  
るつか、

「…………御考えは変わらない様ですね……」

「ええ、折角の御好意ですが申し訳ありませんねえ」

「分かりました、出来るだけ貴方の御要望に沿える様に致しましょう。全く……やはり貴方は変な方ですねえ」

大天使の声は、そのものが天からの福音の様に神々しく辺りの空間に響き渡る。

「さてと粗方自分の要望は聞いて貰えるようですから、安心して新しい世界に旅立たせてもらいましょうか」

「まだ細かい所の説明やお伝えしなければならない事が多々有るのですが……」

「もう充分ですよ。それに……」

「それに……？」

「自分の新しい人生ですから、手探りで成長を感じていきたいじゃありませんか。だからこれで充分なんです、さあ、早くあちらの世界へと送つて下さい」

「やつぱり変ですよ、貴方……でも短い時間でしたが貴方とお話ししていく感じられた事は、今迄の遣り取りは実に貴方らしい……と言つ事でしょうか、それでは司馬田さん、今一度目を閉じて下さい」

「はい……」

「ゆづくつと氣を落ち着けて……はい」

不思議な事に尚志が田を閉じた途端に急速に尚志の意識は混沌して行き、まるで風呂にでも浸かっている様な感触に包まれる。大天使の声が徐々に聞こえなくなり、寄せては返す様な波の音に変わり自らに意識が完全に途絶える時

「将……太……愛……香……幸せ……に……」

それが現世での尚志の最後の言葉だった。

## プロローグ 4 旅立ち（後書き）

どうも墮落論です。

『司馬懿仲達の憂鬱』 プロローグの最終回を書かせて頂きました。  
書きながら思ったのですが、オリ主と大天使の口調がモノの見事に  
被っちゃっていますねえ……（苦笑）

さて次回からやっと本編です。精一杯頑張って書きますのでどうか  
宜しくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2154y/>

---

司馬懿仲達の憂鬱

2011年11月10日16時02分発行